

# 大暴れの転生者

月光花

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

息抜きで思い付いた転生物の話を短編集で書いたものです。

基本的にはリリカルなのは考えますが、思い付きなのでわかりません。

# 目次

特技？ 広域破壊です	前編（リリカ
ルなのは）	1
特技？ 広域破壊です	中編（リリカ
ルなのは）	13
特技？ 広域破壊です	後編（リリカ
ルなのは）	22
特技？ 広域破壊です	続 その1
44	
食うのに困って入った職場がまさかのカ	
ルト教団だった その1（シャイニング・	
レゾナンス）	69



# 特技？ 広域破壊です 前編（リリカルなのは）

## Side Out

時空管理局発祥の地、第一管理世界ミッドチルダ。

現在、その世界は混乱の真っ只中であつた。

ジェイル・スカリエツティ。

生命操作や生体改造、精密機械の技術に優れた科学者であり、ロストログリア関連以外にも数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者。

その正体は管理局最高評議会がアルハザードの技術を使って生み出した存在。アンリミテッドデザイア、無限の欲望である。

その無限に等しい探求欲の導きは創造主である最高評議会と地上本部中将、レジアス・ゲイズの命すらも奪い、ついには古代ベルカの王「聖王」が所持していた超大型質量兵器『聖王のゆりかご』を目覚めさせた。

そして、彼の愛する娘達であり傑作でもあるナンバーズと無数のガジェット群による一斉攻撃がミッドチルダの各所で勃発しているのだ。

時空管理局は地上本部、及び本局の総力を挙げてこの攻撃に対応。各地で大規模の戦

闘が開始された。だが、AMFを常備しているガジェットを前に、管理局の戦況は次第に不利になっていった。

\*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

「……………おう、調子はどうだ」

首都の周囲に広がる廃棄都市部。そのハイウェイの上には、数名の管理局員達がい  
た。

その中には担架の上で休むギンガ・ナカジマがいて、その傍には彼女の頭を撫でなが  
ら優しいな視線を送る父、ゲンヤ・ナカジマがいる。

「……………ちよつと、不調かな」

少し動くだけで痛みが走る体に苦笑しながら、ギンガは答える。

彼女は先程までスカリエッティに操られ、妹であるスバルと激闘を繰り広げていた。

元に戻る事こそ出来たが、ボロボロになった体はしばらくは動きそうになかった。

「……………ねえ、父さん」

「なんだ？」

「スバル達は……………大丈夫だよね？」

そう言つてギンガが見上げた空には、戦闘の光を輝かせながら浮かぶ巨大な船。

そこでは彼女の妹が、たくさんの仲間が今も戦っているのだ。

「心配すんな。お前が預けた力もあんだし、きつと大丈夫さ」

「うん……………」

にやりと笑うゲンヤの言葉に頷き、ギンガは再び空を見る。

そんな時、配給されるストレージデバイスを持った1人の武装局員が慌ててやって来た。

「部隊長、大変です！ 急いで退避してください！」

「どうした？」

「何体かのガジェットが前線の防衛網を潜り抜けたそうです。此処から近い位置ですの  
で、急いで退避を！」

そう言われて周りを見ると、他の局員達も慌てて撤収準備を始めている。

確かに、この場所には最低限の戦力しか用意されていない。しかも何人かの負傷者ま  
で抱えた状況では防衛も何もあつたものではない。

ゲンヤも急いでギンガを運ぼうとするが、それよりも早く撤収準備を始める陣地の中に1つの巨大な影が飛来した。

その場にいた全員の視線が集まると、そこにいたのは一体の巨大なガジェット。

中心にオレンジ色のセンサーを装備した球体状のボディ。そこから2本の黒いベルト状のアームを伸ばし、他にも補助用のアームケーブルが6本浮いている。

「こいつは………III型か!」

ゲンヤの言葉を聞き、その場にいた全員がマズイと心の中で呟いた。

このガジェットIII型は大型・重装甲を重視されており、火力やAMFはもちろん、単純な装甲硬度も他のタイプに比べると優れている。

だが、ここにいる武装局員は殆どがCランク、高くてもBランク止まりだ。ハッキリ言ってIII型の相手をするには不十分だ。

ギンガが本調子で動ければ容易に倒せただろうが、今は動けない。

つまり、この場にガジェットIII型が現れたのはピンチ以外の何でもないのだ。

「ギンガ………っ!」

動けない娘を守ろうと、ゲンヤは守るようにギンガの前に立つ。

立ちほだかる存在に対し、ガジェットはベルト状のアームを高く振り上げた。そのまま振り下ろされれば、ゲンヤの命は容易く絶たれることだろう。



そのまま、前置きも無く腕は振り下ろされた。ギンガは動かない父を助けようとするが、身体がまったく動いてくれない。

動けぬ代わりに声が出る。だが、ゲンヤは動かず……ただ両手を広げた。

瞬間、視界を覆う程のガジエットの巨体が頭上より降り注いだ何かに潰された。

「……………え？」

呆然と呟くギンガが見たその正体は、岩だったそこら辺の廃墟を探せば何処にでも転がっているような瓦礫である。それがガジエットを押し潰したのだ。

何故岩が？ という疑問が浮かぶ中、ギンガは岩の一部に淡く揺れる褐色の光を目に捉えた。まるで炎のように見えるが、恐らく魔力だろう。

「ああ、お怪我はありませんか？」

声が出た。まだ幼さが宿るが、その反対に何処か枯れた大人のような冷静さを感じる。

聞こえた方向に見えたのは、一人の少年だった。

見かけからして、年齢はまだ10歳を超えて少しだろうか。背丈もギンガの胸元に届くかどうかくらいだ。しかし何故だろう、ギンガだけでなくゲンヤでさえも一瞬自分の方が年下なのでは、という錯覚を感じた。

服装はフードが付いた赤茶色のジャケットに、無地の黒いズボン。だがフードを被った顔は変身、または幻影魔法の応用か異常に影が濃くて見えない。僅かにフードの中からはみ出た髪の色は濃い栗色だ。

だが、その姿よりも全員の目を引いたのは、その少年が右肩に担ぐ長い包みだ。包帯にグルグル巻きにされていて姿はわからないが、長さはおよそ3メートル程で、少年の背丈とどうしても釣り合わない。

明らかに異質。いや、そもそもこの場に子供がいること事態異質なのだが、この少年からはそれを上回る別種の違和感を感じる。

「坊主、今のはお前が……いや、そんなことより何でこんなところにいる! 此処は危ねえんだ。助けてくれたのはありがたいが、急いで親御さん達と一緒に非難を……!」

「ああ、お気持ちはありがたいのですが、両親はもういません。先程偶然攻撃に巻き込まれ、瓦礫に潰されてしまいました」

『っ!?!』

口にした事実はもちろんだが、両親の死を淡々とした口調で語る様子に全員が息を呑む。

『ふむ、瓦礫の中から遺体を探し出すのはいささか苦勞したがの』

新たな老人のような声は少年の左手首に付けられたガラスの飾り紐から聞えてきた。恐らく、アレが少年の持つデバイスなのだろう。

そう聞くと、ギンガは少年の足元に広がる小さな血溜まりを見つけた。

その上にあるのは、何かで切り裂いたかのような無数の傷を負い、血だらけになっている少年の両手。もしかすると、瓦礫を素手で掘り続けたのだろうか。

「ああ、出来れば遺体を安全な場所に運びたかったのですが……少し、連中に頭がききました」

そう言った少年は密かに両手を強く握り締め、ポタポタと更に多くの血を流す。

そして、影の濃いフードの中から零れた水滴と光の筋をギンガは確かに見た。

己の心の中で渦巻く激情を必死に留め、少年はこの場に復讐を果たしに来たのだ。

『ふむ、新たな命を宿す際に神より授かった力。使うつもりは無かったが、所詮は真似物、例え私怨で振るおうと咎められはすまい』

フードの中から怒りと悲しみの気配を漏らしながら、少年は歩き出す。

視線の先には、新たに後続でやって来たⅢ型を先頭にやって来た数機のガジェット。

その場にいる全員の顔に再び絶望が宿るが、その時にはもう少年は動き出していった。ボオン! とアスファルトが爆発音を鳴らして砕け、凄まじい加速によって少年の姿が掻き消える。次の瞬間、少年は右肩の包みを手に空高く跳んでガジェットの上ぐ上にいた。

その速さは近接戦闘を得意とするギンガでも一瞬見失う程であり、少年は手に持つ包みを大きく振りかぶって横薙ぎにフルスイングした。

すると、包みはⅢ型のガジェットボディに深くめり込み、振り抜かれると共にその巨体をまるでボールのように後方へ吹き飛ばした。

吹き飛ばされたⅢ型はボーリングのように他のガジェットを巻き込み、轟音を立てて廃墟の中に突っ込んでいった。数秒遅れて大爆発が起こり、幾つかの建物が崩壊する。

続いて少年が包みを虚空に振り抜く。すると、包みの先端から褐色の糸が伸びて廃墟の一部にピタリと付着し、瓦礫が引っこ抜かれて包みを振り抜いたコースに従って高速で飛ぶ。

巨大な瓦礫が弧を描いて飛来し、固まっていた数機のⅠ型ガジェットが纏めて押し潰される。

あつという間に後続でやって来たガジェットが全滅し、静寂が訪れた。

(すごい………どういいう術式を使ってるのかわからないけど、とんでもない出力の強化

魔法……あれ？ え？ うそっ……！！）

少年の動きにギンガは感心するが、戦闘機人としての目が伝える情報に目を見開いた。

強化魔法が働いていると思われた少年の体から魔力が感知されなかったのだ。つまり、脚力にしる腕力にしる、今の少年の動きは自分の身体能力だけで実現されたもの、ということになる。

だが、果たしてそれが人間に出来ることなのだろうか。

「……………ああ、どうやらまだまだ来ようですね」

『ふむ、前方と左右に数十機、半ば包围されかけておるな。しかし、この場所ならば……………』

「ああ、材料にも困りませんし、首都にも被害は出ないでしょう。出来れば皆さんは此処から動かないでください。巻き込んで殺しかねません」

少年のデバイスが言うとおり、周囲には今やって来た規模を遥かに上回るガジェットが展開している。

だが、少年は冷静に局員達に忠告し、地面を蹴ってハイウェイから高く跳躍した。

その姿はまるで大軍に一人挑む戦士のようにであり、少年の持つ力はそれに応える程に、強大だった。

「偽装」

『魔力統制機関、『カデシユの血印』起動』

少年の短い呟きにデバイスが答え、少年の体を覆うように術式の陣が形成された。その形はミッドチルダ式ともベルカ式とも異なり、独特の形をしている。

『続いて魔力接続経路、カデシユの血脈を形成』

「展開」

天に掲げるように振り上げた包みの包帯が解かれ、その姿が明らかになる。

変わった魔法陣の中で高く聳え、鈍い銀色の輝きを放つそれは、鉄棒。先程ガジエツトを破砕して吹き飛ばしたそれこそ、少年の持つ非人格型アームドデバイス、メケスト。

そして少年の全身を包む魔法陣が激しく発光し、そこから褐色のエネルギー流、太い魔力の糸が弾かれるように周囲に拡散した。

拡散した魔力糸が放物線を描いて廃墟に降り注ぐ。すると、魔力糸が付着した点が燃えるように淡く輝き、もぎ取られた瓦礫が少年の元に吸い寄せられた。

『結合完了。カデシユの血脈に同調』

集まった瓦礫は少年を包む魔法陣を上書きするように重なり、やがて魔力光のラインを走らせた物質形成の魔力スフィア、『カデシユの心室』が形成される。

そのスフィアの上にさらに膨大な量の瓦礫が集められ、やがて一つの形を成してい

く。

大きく、大きく、強く、強く。

その願いを形作るように、瓦礫を纏った小さな少年の姿は、20メートル近くの瓦礫の巨人となった。

ただ瓦礫を繋ぎ合わせたような無骨な作りにも見えるが、その形は確実に人のそれであり、魔導師の力の形を知る局員達の顔には驚愕しかない。

轟音を立てて地面に着地した巨人が動き出し、握り締めた右拳を腰溜めに引き絞る。

勢い良く拳がアッパーのように振り抜かれ、大気をぶった斬るような風が吹き荒れる。そして、虚空を振り抜いた拳は数秒送られて巨大な衝撃波を生み出した。

その衝撃波は一直線に突き抜け、爆音を鳴らしながら広がる廃墟を破壊し、ガジェット群を直撃した。シヨックウェーブが通り過ぎた廃墟はもはや瓦礫まみれの荒野だ。

続いて巨人の左腕がラリアット気味に右へと振り抜かれ、今度は巨人の左側を薙ぎ払うような広範囲の衝撃波が吹き荒れる。

「ああ、随分と久しぶりにやってみましたが、問題無さそうですね」

『ふむ、力の起源を魔導に変えたとはいえ、この技法は存在、いや魂に刻まれしもの。そう簡単に術の練度は衰えはすまいて。むしろ、前よりも磨きが掛かっておる』

隠れていたガジェットが建築物と共に根こそぎ薙ぎ払われ、瓦礫の巨人は右の手の平

を握ったり閉じたりと繰り返す。

心室の中で軽く話した少年とデバイスは巨人の状況をよく確認し、動き出す。

「ああ、では始めましょうか。ベヘモット」

『ふむ、自身の願いの為の戦い。思う存分暴れるとしようか』

何処までも落ち着いた口調で話す少年とデバイスは、再び動き出した。



# 特技？ 広域破壊です 中編（リリカルなのは）

Side Out

「何なの、アレは……」

聖王のゆりかご最深部にて、クアットロは呟いた。

彼女が見詰める先のモニターに映っているのは、瓦礫で作られた巨人。

先程首都に向かって降下させた数十体のガジェットを瞬く間に全滅させたその存在は、改めて見たクアットロに恐怖心を感じさせた。

最初は拳を振り下ろす度にⅠ型とⅢ型を粉碎し、発生した巨大な土煙の柱でⅡ型を吹き飛ばしていた。

だが、今は巨人の右手には新たな武装が握られていた。

岩を固めて作られた3メートル近い柄、そこから複数の岩塊や瓦礫を褐色の魔力で繋いで伸ばしたその形状は巨大な“鞭”だった。

振るわれる度に一定範囲を地形ごと抉るような衝撃が襲い、それなりの頑丈さを持っているはずの建築物が薙ぎ倒される。

管理局の魔導師が手を焼くガジェットを寄せ付けることすらしないその強さはク

アットロから見れば規格外の一言。

だが、それはあくまで地上戦での話だ。

地上で戦う戦力に勝ち目は無いだろうが、ゆりかごの現在位置は空中。脅威は無いし、もはや作戦に大した支障は無い。

「あと少し……あと少しでゆりかごが衛星軌道に到達する。そうすれば、もう敵など存在しません」

2つの月からの魔力を受ければ、ゆりかごは高い防御性能だけでなく、強力な対地・対艦攻撃に加えて次元跳躍攻撃も行えるようになる。

そうなれば管理局の戦力がいくら来ても問題無い。もはや敵無しだ。

「ふふ……せいぜい地上で暴れまわっていてくださいな。巨人さん」

指先でモニターを撫でながら、クアットロは余裕の笑みを浮かべる。

だが、余裕を浮かべるクアットロの表情は、すぐに歪むことになった。

\* \* \* \* \*

一方、クアットロの見下ろしていた地上では、瓦礫の巨人が大規模破壊を繰り広げていた。

右手に握る岩と瓦礫で作られた巨大な鞭、メケストが振り下ろされて目の前の建物が碎かれ、その付近にいた数体のⅢ型とⅠ型を押し潰す。

「……ああ、罅が明きませぬね。正直かなり面倒です」

『ふむ、大量であつても敵が小さいからの。大分減つたとは思うが、周りの建物に隠れている敵は苦勞しそうじゃな』

瓦礫の巨人に比べ、対するガジェットはかなり小さい。おかげでガジェットの攻撃はまったくと言って良いほど巨人に通用していない。

だが、敵が小さ過ぎる、さらに機動力で明らかに劣るせいもあつて瓦礫の巨人の攻撃に先程から連続で撃ち漏らしが発生している。

さすがに少年の声にも僅かな苛立ちの気配が出てきた。

「ああ、確かにこの力が欲しいと願つたのは私ですが……戦い方が大雑把なところも含め、容姿や口調まで似せたのは今でも意外です」

『ふむ、じゃがその戦い方が似たおかげで、この場合はどうするかすぐに決まるじやろう』

「ああ、先程の局員の皆さんには当てないようになくは……」

瓦礫の巨人が腰に捻りを加えて後ろを振り向き、メケストを振るう。

衝撃で大地が震え、無数の瓦礫が宙に跳ね上がる。

「セトの車輪」

『カデシユの血印配置。続いてカデシユの血脈に同調』

周囲に舞い上がった瓦礫が燃えるように輝き、メケストの先端から飛び出した魔力糸がスパークを撒き散らしながら付着する。

すると、周囲の瓦礫が弾かれたようにメケストの遠心力と共に高速で射出され、あらゆる方位にばら撒かれる。

軽く見ても2メートルはある無数の瓦礫が周辺一帯の建物や地面に転がり跳ねて激突し、高威力の爆弾を炸裂させたような大爆発。続いて周辺に褐色の魔力の暴風が吹き荒れる。

少年が注意したように攻撃の被害はギンガ達には及ばなかった。だが、それ以外の場所を襲う攻撃には照準の気配など微塵も感じられず、建物ごと周囲に隠れるガジェットを殲滅した。

瓦礫だらけの荒野を通り越し、もはや絨毯爆撃でも行つたような地形の中に残っているのは瓦礫の巨人だけだ。

「……ああ、どうやら全て片付いたようですね」

『ふむ、しかし程無く次の敵もやってくるじやろうて』

『ああ、ではこれからどうしたものでしょうか「坊主」……ん?』

カデシユの心室の中で聞こえた声に反応して振り向くと、そこには遠くのハイウェイの上で声を張り上げるゲンヤの姿があつた。

不思議に思つた少年の動きに連動して瓦礫の巨人が首を傾げる。

「お前、アレを何とか出来ねえかあ!!」

ゲンヤが大声を上げながら指を差した先には戦闘の光を輝かせながら空を飛んでいる巨大な船、ゆりかごが見える。つまり、アレを落とせるかと聞きたいのだろう。

少年は数秒間だけ意識を思考の海に沈めて決断。ゲンヤの場所へ映像無しで声のみの通信を開いた。

「ああ、端的に言えば出来ます。3分待ちますので、艦の左舷から戦闘中の局員を全員退避させてください。でなければ間違いなく巻き込みます」

『わ、わかつた! 時間までに局員を退避させる!』

ゲンヤの返答を聞いて少年は通信を遮断。瓦礫の巨人の右手の中で再びメケストが柄となり、岩塊を繋ぎ合わせて鞭を形成する。

「……ああ、見たところ射程範囲ギリギリの高度でしょうか」

『ふむ、確かに距離的には不安なところじゃが、一度当てればこちらのもの。外した場合

は微調整を行えばよからう』

少年はもう一度ゆりかごを見上げながらべへモットに確認を取る。

「坊主! もういいぞ! やってくれ!」

ゲンヤの言葉を聞き、瓦礫の巨人が動き出す。

メケストの先端にもう一段大きな岩塊を形成し、背中越しにまで鞭を大きく振りかぶる。その構えは何かを投擲するように見える。

「ラーの礫」

瓦礫の巨人が右腕を振り切る。

烈風を吹き荒らせながら振るわれた鞭の先端から岩塊が分離、大質量の物体が射出される。そこへ褐色の魔力が爆発するように吹き荒き出して二次加速を加え、ゆりかご目掛けて真っ直ぐ飛んでいく。

ここで言うと、ゆりかごの外部装甲には単純な防御力だけでなく、強力な出力のAMFを常時展開している。

それは同時に前線で戦う八神はやてが広範囲攻撃の大火力をガジェットの撃墜に集中させている理由でもある。

だが、『ラーの礫』に働いている魔力作用は射出後の二次加速のみ。そして、いかにAMFとはいえ発生した物理作用、慣性にまで干渉することは出来ない。

つまり、瓦礫の巨人の攻撃に対し、AMFは無意味なのだった。

一切の威力減衰を受けず、射出された岩塊はゆりかごの左舷に直撃する。

すると、数十キロは離れた少年やギンガ達の目に映るゆりかごの左舷に着弾と同時に一際大きな大爆発が襲い、船体が目に見えて傾いた。

直径数キロはあるゆりかごの船体が……こう、ガクリと大きく傾いたのだ。

たった一発で古代ベルカのロストログアに損害を与えたその破壊力にギンガ達が今度こそ言葉を失う。

「……ああ、まさか当たるとは。それも一発で……」

『ふむ、思わぬ誤算じゃが、これで次も当てられよう』

だが、攻撃を放った本人とその相棒は色んな意味で怖い発言をしていた。

少年の攻撃は破壊力こそ他者の追従を許さぬほどに絶大だが、その半面で照準性能が半分術者の感覚頼りとかかなり大雑把なものになっている。

しかし、一度当たれば魔法の力を借りてその座標を元に照準補正を行える。

一時的に足が止まったゆりかごに避ける術は存在せず、少年の見立てではアレを無効化するには、一撃あれば充分だった。

「ああ、では……………終わりにしましょうか」

『ふむ、いかに古の戦船とはいえ、駆動炉を潰せば少しは静まろう』

少年の瞳が細められ、纏う雰囲気の中に明確な敵意が宿った。

その意思を行動に移し、瓦礫の巨人が握り締めた左拳を持ち上げる。空にかざした鉄槌が向く先には空に浮くゆりかご。

これから何をするのかわからないギンガ達でもその様子から大きな危機を感じ取り、言葉を出さずに瓦礫の巨人を見詰める。

だが……………

「つ……………ああ、これは……………」

はつと何かを感じた少年の眩きに続き、瓦礫の巨人が突如身を翻した。

振り返ると共にメケストが右薙ぎに振るわれ、放たれた『ラーの礫』が二次加速を得て建築物の真上を突っ切る。

飛んだ岩塊を全員の目が追う。すると、その岩塊はすぐに紫色の魔力砲と衝突し、大爆発を起こして勢いを完全に相殺した。

生じた爆風が周囲に吹き荒れる中、背後を振り返る瓦礫の巨人が紫色の砲撃を放った主と相対する。



そこにいたのは、ある意味で瓦礫の巨人よりも異質な存在だった。

全長は瓦礫の巨人よりも一回り小さく、約15メートル程。

見るからに硬質な外骨格にそれを支える巨人な筋肉。背中から伸びる4枚の半透明な羽は昆虫を思わせるが、人型に近い体は両足で確かに二足歩行を可能にしている。

その巨体の四肢だけでも充分な猛威を振るうだろうが、その腹部に輝く水晶体から紫色の光が漂っているのを見ると、先程の砲撃を放ったのはこいつらしい。

だが、何故かその両目からは真っ赤な血の涙がとめどなく溢れている。

まるで何かに囚われたように、苦しむように、抗うように咆哮を上げる。

その存在は、ルーテシア・アルピーノの所有する究極召喚『白天王』。

「ああ、見た所人工生命体ではないようですね。魔法で洗脳処理を施した原生生物か、誰かが呼び出した召喚獣か、いずれにせよ……」

『ふむ、元より個人的な恨みへの復讐から始めた戦い。敵たる以上、我等はただ戦うのみ』

しかし、少年とベヘモットのやることは変わらない。

彼等は戦う為にやってきた。

心の中の雑念を捨て去り、瓦礫の巨人は歩を進めた。

# 特技? 広域破壊です 後編 (リリカルなのは)

Side Out

「何なの……何なのよアレは!!」

ゆりかごの最奥部にクアットロのヒステリックな叫び声が木霊した。

その様子には微塵の余裕も無く、血走った瞳が捉えた先には損害を知らせる無数のアラートモニターが真っ赤な光を発している。

だが、その中でも一番大きなモニターには地上の戦闘が映し出されており、そこには前と同じく瓦礫で形作られた巨人が映っている。

いかに強力であろうと地上にいれば脅威にはならない。そう思っていたが、その考えはほんの数分で崩れ去る事になった。

瞬く間に地上のガジェット群を殲滅させたまでは予想出来た。だが、その後の行動はクアットロの予想を容易に上回った。

なんと、巨大な岩塊を超高速でぶん投げるといふ原始的な攻撃方法で数十キロ離れた空中のゆりかごを攻撃したのだ。

だが、原始的なだけあって巨人の攻撃はゆりかごに文字通りの大打撃を与えた。

射出された岩塊はゆりかごの左舷を直撃、一瞬で膨大な損傷を負わされた。飛んでい  
るだけならまだ平気だが、上昇速度は致命的に低下した。

しかも、着弾部から発生した大規模な火災が一向に止まらない。

これ以上の損害を避けるため、地上の巨人には既に手を打った。だが、こちらの打開  
策はそう簡単には見つけれない。

「まだ……まだよ！ 私は、こんな所で終わらない！ 終わって、堪るもんですか……  
！」

歯を噛み締めながら、クアットロは両手をキーボードに走らせる。

諦めるという選択肢は彼女に存在しない。

生みの親の因子を一番強く受け継いだ故に、すでにその親であるスカリエッティさ  
え見捨てたのだ。ここで止まれば、クアットロには本当に何も残らない。

たった一つ、それで強大なイレギュラーによって、戦いは終局へと近づく。

\* \* \* \* \*

一方その頃、地上では管理局の歴史上でも初の激戦が繰り広げられていた。

瓦礫の巨人と白天王の戦いは、魔導師や騎士の戦闘などとは比べ物にならない程の破壊を周囲に撒き散らしていた。

どちらか片方の攻撃1つで大地が揺れ、生じた衝撃波が廃棄都市の大地を砕く。

裏拳のように振り抜かれた白天王の右腕が巨人の胴体をぶん殴り、お返しとして放たれた巨人の左ストレートが白天王の顔面を捉えた。

互いに数歩後退するが、即座に自らの敵へと前進する。

巨大な爪を生やした白天王の右腕が突き出され、巨人は左腕を盾にして阻む。爪が突き刺さった部分から巨人の腕が崩れるが、それよりも早く巨人の右腕が動く。

右手に握られたメケストが右薙ぎに振り抜かれ、白天王の横っ腹を狙う。直撃の寸前に白天王が左腕を割り込ませ、硬質な骨格が直撃を防ぐ。

だが、膨大な質量と遠心力を持つメケストの破壊力を殺しきれず、防御した白天王は左腕の骨格に無数の亀裂が走らせ、後方へぶっ飛ばされた。

倒れた敵に追撃を仕掛けようと巨人はメケストを高く振り上げる。

だが、それを阻むように左右と後方から巨大な雷撃が飛来し、巨人の体が爆発と共に削られ、体勢が崩れる。

攻撃が来た方向を向くと、そこには体から放電現象を発し、二本の角を生やした四本

足の巨大な昆虫、地雷王が合計4体いた。

巨人は標的を変更し、自分を取り囲む形で陣を組む地雷王を先に潰そうと歩を進める。

しかし、4体の地雷王は敵を近付けまいと即座に魔力を使用して振動波を生成、巨人を標的とした局地的な大地震を発生させた。

最低でもM7クラスに届く大振動が狭い範囲内で絶えず巨人を襲い、足元の地盤が瞬く間に轟音を立てて崩壊し始めた。

巨人の移動速度では逃れること間に合わず、巨人の両足は崩れ去った地面に膝元近くまで深く突き刺さった。

「ああ……これは少々……っ！」

『ふむ、マズイかの』

『カデシユの心室』内部で襲い掛かる震動に耐えながら、少年は周囲を見回して一刻も早く打開策を探す。でなければ、震動で揺さぶられている脳がどうにかなりそうだ。

まだ沈んでいない上半身を操り、巨人は右手に持つメケストを地面に振り下ろす。

「セトの車輪」

先程よりも少量だが、舞い上がった瓦礫にメケストの先端から飛び出した魔力糸がスパークを撒き散らしながら付着する。

後はメケストの遠心力と共に周囲へばら撒かれるのだが、巨人はメケストを自分の真上に見掛けて振り上げ、瓦礫を天高く射出した。

ほぼ垂直に打ち上げられた瓦礫は僅かな放物線を描いて落下し、巨人を中心にした約半径15メートルの範囲内に無差別爆撃となつて降り注いだ。

その爆撃は地雷王4体にも何発か命中するが、無差別な攻撃故に巨人にも直撃した。いや、体が大きいせいで、むしろ巨人の方がダメージは大きい。

だが、そのおかげで地雷王が発生させていた地震は停止。巨人は即座に地面に刺さつた両足を引っこ抜いて歩を進め、地雷王を『ラーの礫』の正確な射程内に捉える。

仕留める、と心の中で狙いを定め、メケストを振り上げる。直撃すれば、確実に地雷王の頭を潰して命を絶つことが出来るだろう。

だが、それを……

「ダメエエエエ!!!」

少女の叫び声と共に放たれた極光が拒んだ。

巨人は直感に従つて右手に持つメケストを振り向き様に背後に振るう。

だが、振るつたメケストは先端に数秒の手応えを感じさせた次の瞬間、消滅した。

「ぐっ……!」

メケストの先端部が消滅すると共に盛大な衝撃が襲い掛かり、巨人の右半身が削れ、『カデシユの心室』内で少年は苦痛の声を上げた。

バランスを崩した巨人は体勢を崩し、地面に膝を付くように倒れた。

「ああ、一体……何が……っ!」

数回頭を振って意識を整え、視線を右腕から後ろへと移していく。

右手に握られたメケストは持ち手近くまで消滅しており、右半身全体が強力な熱によつて溶けている。信じ難いが、どうやら砲撃の熱でやられたらしい。

そして、背後にいたのは一匹の巨大な黒竜だった。

その身から発せられる威圧感は先程戦っていた白天王とほぼ同等。たつた今身をもつて体感した砲撃の威力はもちろん、力も劣つてはいないだろう。

この竜こそ、キャロ・ル・ルシエの最強召喚獣、ボルテールだ。

「ああ、これは驚いた。まさか『真竜』クラスの竜にお目にかかれるとは」

『ふむ、しかも先程の白い召喚獣と違い、術者に制御されておる』

目の前に立つ存在を分析しながら立ち上がった巨人は周囲から瓦礫を引き寄せ、凄まじい速度でポロポロになった体を補強、または再構築する。

続いて持ち手部分だけとなったメケストを作り直し、巨人はボルテールと睨み合う。

そのまま激突するかと思われたが、巨人の前に一匹の白い竜、フリード・リヒが降り立った。

ボルテールに比べれば小さいが、それでも大人が2、3人は乗れる大きさの立派な竜だ。その上には子供が3人乗っており、桃色髪の少女、キヤロが巨人に両手を広げている。

他には赤髪の少年、エリオがフリードの手綱を握っており、少年の腕の中では紫髪の少女、白天王と地雷王の召喚主であるルーテシアが気絶している。

「待ってください！ 私達は敵じゃありません！ あの召喚獣、地雷王や白天王も本当は操られてるだけなんです！ だから、あの子達を殺さないで！」

キヤロの必死な叫びを聞き、少年は漠然ながら状況を理解した。

つまり、あの地雷王や白天王はただ操られているだけで、目の前の少女とその召喚獣はそれを止めたいと言っているわけだ。

先程の砲撃も、ただ召喚獣を殺させない為に放ったのだろう。もし殺す気があるなら、巨人の上半身を丸ごと消し飛ばせばはずだ。

正直言って少年にとっては召喚獣が操られているようが関係無い。何せ、戦いを仕掛けた元々の理由が私怨だ。敵の事情など、どうでも良かった。

だが、すでに異常な強さを誇る少年にも、流星に『真竜』クラスの竜と、それと同ク



ラスの召喚獣を同時に相手に出来る余裕は無い。

どうしたものかと思いで思考を働かせるが、事態は少年に熟考の時間を与えなかった。

巨人の前に立つボルテールが横に突然突き飛ばされ、その後ろから先程メケストによつて吹き飛ばされた白天王が飛び出してきたのだ。

「白天王……！」

キヤロが泣くような声を上げるが、白天王は血の涙を流すだけで止まらない。

「っ……！」

少年の意志に従い、弾かれたように動き出した巨人は左手だけで白天王を押し留める。

「ああ、早く離れて……！」

少年の言葉に反応し、フリードはその場から急速離脱。

それを確認し、巨人は右肩のシオルダータツクルを白天王の胴体に叩き込んで大きく後退させる。だが、巨人は何かを躊躇うように動きを止め、追撃をしなかった。

白天王はそれに遠慮せず、両手を広げて巨人に襲い掛かる。

巨人は右手のメケストの構築を解除して収納、白天王の両腕を掴んで押し合い状態に持ち込み、その動きを完全に止めた。

「ああ、私も甘い……っ!」

『ふむ、私怨とて見方を変えれば自己満足の一種よ。己のしたいようにするのが、最良の決断であろう』

冷酷になれない己を恥じるような少年の眩きに、ベヘモットが静かな助言を与える。

その冷静な助言は少年の心に鎮静剤のような効果をもたらすが、このまま白天王と押し相撲を続けるつもり無い。どうにかしてこの状況を覆す必要がある。

力比べに集中しながらも思考を働かせる中、起き上がったボルテールが白天王を引き剥がして遠くへ投げ飛ばす。一先ず少年を味方と認識したのか、攻撃してくる気配は無い。

これで戦力的には優位になったと思われたが、その安堵を白天王の咆哮が打ち消した。

腹部に輝く水晶体に紫色の光が集束し、照準が定められる。

それに対し、ボルテールも自分の周囲に魔力を集束し、炎熱砲の照準を合わせる。

「ああ、これは……」

『ふむ、間違いなくマズイ。急ぎ走れ』

巨人は身を翻し、白天王とは正反対の方向に走る。

その方向にいたのは、先程から戦闘を見守っていたギンガ達だった。このままでは、

ボルテールと白天王の砲撃衝突の余波に巻き込まれる。

もう少し時間があれば周囲の瓦礫を集めて巨大な壁を作れたのだが、時間が無いと判断した少年は白天王とボルテールに背を向ける形でギンガ達を守る。

何故そんなことをするかと言われれば、先程のベヘモットの言葉を借りて、自分がないから、としか返せそうにない。

数秒後、轟音と共に放たれた2つの砲撃が激突し、廃都市全体に爆音と衝撃波が鳴り響いた。しかも最悪なことに、2つの砲撃が衝突点を中心にあらゆる方向へ拡散し始めた。

拡散した砲撃は無差別に廃都市の大地を破壊し、ギンガ達を庇う巨人の体を衝撃波とともに凄まじい勢いで削り取っていく。

それを見た他の人間達は何とか砲撃を止めようと考えるが、キャロはボルテールに砲撃をやめさせるわけにはいかず、ギンガ達もすぐに戦域から離脱出来る機動力が無いので下手に動けない。

そんな中、拡散した砲撃は確実に巨人の体を破壊し続け、ついには左半身を消滅させて『カデシユの心室』内部に到達した。

「ぐっ……い！」

『カデシユの心室』内にまで及んだ爆発の熱に体を焼かるが、少年は歯を食いしばって痛

みを堪える。下手に動けば損傷が増えて巨人の構築が崩れ、ギンガ達を崩れた瓦礫で押し潰してしまふ。

その状態が十数秒続き、ようやくボルテールと白天王の砲撃の勢いが衰え始めた。

そして、ぶつかり合っていた砲撃は拡散していた衝突点で大爆発を起こして消滅。ボルテールと白天王は互いに反動で吹き飛び、地面に倒れた。

一方、ギンガ達を守っていた巨人は胴体の左半分が完全に消滅しており、『カデシユの心室』を構築する物質構成の魔力スフィアもポロポロだった。

もちろん、中にいる少年も軽くない怪我をしていた。左半身のほぼ全体に火傷を負い、背中と胴体の無数の岩の破片が突き刺さっているせいで血が流れ出している。

そんな誰もがポロポロの状態で倒れる中、瓦礫を押し退けてゆつくりと立ち上がる巨大な影があった。その正体は、白天王だった。

確かに受けたダメージは巨人より少ないだろうが、ボルテールと同等の大ダメージを受けたことは間違いない。それでも立ち上がれているのは、制御不能の暴走状態だからだろう。

白天王は周囲に視線を巡らせ、今動くことが出来ない巨人へと狙いを定めて歩き出した。

「逃げろ! 坊主!」

「ハア……ハア……ハア……ぐっつ！」

ゲンヤの叫び声が聞こえるが、少年は体中から襲い掛かる激痛のせいで体が思うように動かなかつた。マルチタスクを駆使して巨人の体を再構築するが、間に合わない。

そして、白天王は巨人の真後ろに立ち、右腕の巨大な爪を大きく振り上げる。

「逃げてえええ!!！」

「ダメ……ダメだよ白天王……そんなこと、ルーちゃんは望んでない!!！」

巨人を見上げるギンガに続いてキャロが叫ぶが、白天王は振り上げた腕を降ろさない。

地面に倒れるボルテールの助けは間に合わず、巨人は未だに立ち上がることも出来ない。

その場の全員がここで終わりと思った。

だがその時、今まさに命を絶たれようとしている少年の口元が動いた。

「ああ、良かった。どうにか、上手くいきました」

少年の口元には、笑みがあつた。悪戯を成功させた子供のような、年相応の笑みだった。

巨人が残った右腕を持ち上げ、足元の地面に思いっきり突き刺す。

『カデシユの血印』、『展開』

ベヘモツトの声の後、偽装を行う時に見たミットチルダ式ともベルカ式とも異なる独特の形状の魔法陣が巨人の右腕を中心に足元に展開された。

ただ、その大きさは偽装の時とは比べ物にならないほど巨大で、軽く見ただけでも半径10メートルに届く程の魔法陣だった。

すると、魔法陣の範囲内にいた白天王が石化したかのようにピタリと固まり、その動きを完全に止めた。

その異変に周囲が戸惑いを隠せなかったが、少年は安堵の息を深く吐き出し、全身の再構築が完了した巨人を立ち上がらせる。

「ああ、申し訳ありませんが、召喚獣の術者を魔法陣の中へ」

その言葉は空を飛んでいるエリオとキヤロに向けたものだった。2人は少し迷いを見せたが、やがてゆっくりと白天王の近くに降下した。

この異変を可能にしたのは、足元に展開された巨大な『カデシユの血印』である。

『カデシユの血印』の別称は魔力統制機関。つまり、魔力の統率と制御を担当する機関だ。

少年は偽装を行う際、この『カデシユの血印』を支点に『カデシユ血脈』の伸ばし、繋

いだ物体をコアである『カデシユの心室』に接続して巨人を制御する。

つまり、少年は『カデシユの血印』を刻まれた物体、基本的に無機物などを強力な統制力によって自在に制御出来るのだ。

ここで少し話が逸れるが、自在法から魔導師の力へと変貌した『カデシユの血印』には、もう一つ特徴がある。

それは、魔法陣の範囲内であれば内部の魔力運用を思うがままに出来る、というものだ。

具体的に何が出来かで言えば、魔法陣内部の魔力を集束魔法を上回る速度で一点に圧縮したり、敵が使う魔法の術式に干渉して魔力をカット、魔法の発動を無効化することも可能だ。

つまり魔法陣の内部なら、基本的な魔力運用においてこの少年に出来ないことはないことはい。

とは言え、そんなデタラメな真似が出来るのは魔法陣の内部のみ。しかも、巨大な魔法陣を展開させるには位置変更無しでも準備に相応の時間がある。実戦で何度も容易に使えるものではない。

だが、敵である白天王は現在『カデシユの血印』の中にいる。つまり、白天王を含めてその周囲の魔力も少年の思うがままに出来るのだ。

「では、始めましょう。ベヘモット」

『ふむ、本領とは離れるが、これも腕の見せ所よな』

『カデシユの心室』内で少年は左手で右手の手首を握り、右腕を前に突き出して目を閉じる。ベヘモットの言う通り、これから行うのは本領ではない。集中したいのだ。

少年はキャロに、召喚獣は操られているだけ、と言われた。

召喚獣を暴走させるということは、召喚した術者に何らかの処置を加えたということだ。ならば、方法は3つ。

まず、術者に施された処置を取り除くか、処置を施した装置か人間を無力化する。これで2つだが、最後の1つは、発動させた召喚魔法そのものをキャンセルして召喚獣を強制送還すること。

少年が今から行おうとしているのは、この内の1つ目と3つ目。かつて『偽装の駆り手』と呼ばれたフレイムヘイズが、“壊刃”の名で知れた紅世の王を葬るのに使った手段と似たものだ。

少年の力なら白天王の召喚魔法に干渉して魔法をキャンセル出来るし、恐らくルーテシアに施された処置も無効化出来る。

施された処置が魔法ではない催眠術だったらお手上げだが、魔導技術と共に化学文明が大きく発展しているミットチルダでその可能性は低いと少年は考えた。



そしてその結果……

（ああ、召喚魔法のキャンセルと強制送還の用意は完了ですね。しかし、術者の方は不完全ながら人造魔導師とは……）

（ふむ、後天的に処置を受け、その際に脳の一部を魔法で改造されたようじゃな。幻覚、あるいは記憶操作の魔法を応用して強制的に暴走状態を作っておる）

念話で話しながら喚魔法の術式を書き換え、白天王を強制送還。さらにルーテシアを通じて地雷王も強制送還させる。

続いて暴走の原因である魔法の術式を順に解析し、ルーテシアの脳に後遺症が残らないよう細心の注意を払いながら解除していく。

（ふむ、遠隔操作で好きな時に発動出来る仕組みじゃな。恐らく、術者が戦意を損失した場合を想定してのものじゃろうな）

（ああ、ですが、殆どが魔法による処置だったのは私達にとつては幸いでした。これならば問題無く解除は可能ですし、収穫もありました）

そして、完了と同時に白天王と地雷王の足元に魔法陣が展開され、体がゆっくりと地面に沈んでいく。

少年からは見えないが、エリオが抱えているルーテシアの顔色も良くなつていく。

これで万事解決、全員がそう思つて気を緩めようとした時、巨人が動き出した。

ギンガ達の傍から離れ、1度目の『セトの車輪』を使った場所へと歩いていく。絨毯爆撃を受けたような地形の上に立ち、巨人は再びゆりかごを見上げた。

『ラーの礫』を直撃させた時と大して高度は変わらっておらず、艦の左舷からは数十キロ離れたこの場所からでも分かるほどの黒煙が昇っている。

「ああ、それでは……」

『ふむ、仕上げといこうかの……』

先程ルーテシアに施された魔法を解除した際に、分かったことがあった。

ベヘモットが言ったように、あの魔法は遠隔操作で発動するものだった。術式を調べてみると、その発信源が特定出来たのだ。その場所は、ゆりかごの下方、最深部。

少年には元々敵意を向ける明確な相手もいなかったが、この情報とゆりかごの存在は正直ありがたかった。

最深部にいる人物と、空に浮くゆりかご。この2つが、今の少年にとっての憎しみのぶつけ先に決められたようだ。

巨人は拳を握り締め、右腕を腰溜めに引き絞る。すると、右腕の肘部分から魔力が噴き出し始めた。

「アテンの拳」

引き絞られた巨人の右腕が真っ直ぐ突き出され、大気を貫くような突風が起こった。

直後、巨人の右腕が肘先から切り離され、後方からの魔力のジェット噴射によって飛んでいった。要するにロケットパンチである。

射出された巨人の腕はミサイルのような速度で空を突っ切り、下降の勢いを一切見せずによりかごへ直進する。

数秒後、『アテンの拳』は避けることも出来ないよりかごの下方に直撃。命中した次の瞬間に大爆発を起こし、よりかごの最深部ごと下方全体を完全に破壊した。

『ラーの礫』を上回るその破壊力にまたしても全員が言葉を失った。

もし、あの時キャロが止めに入らなければ、ルーテシアの召喚獣は一匹残らず巨人に皆殺しにされていたのではないだろうか。

そんな不安が横切ったが、管理局員であるエリオとキャロは詳しい事情を聞こうとゆっくり巨人に近付いていく。

しかし、それよりも少年の決断の方が早かった。

「ああ、こんなものでしょうか。復讐とは、思っていたより……」

『ふむ、空虚、か？　じゃが、憎しみという感情が消えれば、後には何も残らぬものよ。

その喪失は当然の現象、受け入れるほかあるまい』

「ああ、では退散するとしましょうか……起動」

『『カデシユの血脈』形成』

大した前置きも無しに少年は魔法を発動させ、ベヘモットも当然のように従う。

最初の異変は巨人の体が急速に崩壊し始めたことだった。それに続いて廃都市の各所から『カデシユの血印』が浮かび上がる。

しかし、その数が異常だ。フリードに乗るエリオ達から見ても1000以上はある。

だが、それもそのはず。少年はこの廃都市でギンガ達を助けた時からずっと、自分が破壊した瓦礫や岩の全てに『カデシユの血印』を配置していたのだから。

巨人の体を作る材料、というのが最もな理由だが、これだけの数を用意した理由は別にあつた。

「同調」

『カデシユの血印、開放』

その瞬間、『カデシユの血脈』によって廃都市の各所に設置されていた無数の『カデシユの血印』が連結、同調。

その全てが、一斉に魔力爆発を起こした。

ドオオオオオオン

!!!!!!!

鼓膜を直接ぶつ叩くような爆音と爆風を響かせ、廃都市全体に及ぶほどの魔力の暴風

が起こった。物理的な衝撃や力はただの風と同じだが、1つ違う点がある。

「っ………キャロ！ 索敵魔法である巨人の術者を……！」

「だ、ダメ！ この魔力乱流のせいで、サーチャーもデバイスのセンサーもマトモに動かない！ これじゃ何も分からない！」

そう。魔力の台風とも言えるこの風は、規模が大きいほど索敵魔法のスフィアやデバイスのセンサーに致命的なジャマー効果をもたらすのだ。

そして魔力の風が止むと、巨人の体は完全に崩れ去っており、積み重なった瓦礫意外には何も残ってはいなかった。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

一方、少年はすでに戦闘地域を離れ、廃都市を抜けて首都の街中を歩いていた。

肩に担がれていたメケストは収納されており、ベヘモットの本体であるガラスの飾り紐の一部になっている。

服の下に隠された怪我が激痛を訴えているはずなのに、少年は苦痛の表情一つ浮かべず黙って歩いている。その姿に、ベヘモットも何も言わない。

「あ……」

やがて、少年の足が小さな眩きと共に止まった。

目の前には、外部からの攻撃を受けて崩れ去った複数の家があり、そのすぐ傍には毛布を掛けられた遺体が2つ置かれている。

少年はフードを脱ぎ、目の前に横たわった両親の遺体の傍に立つ。

少々褐色が混じった黒髪が風に揺れ、ニキビ一つ無い褐色の肌が外気に晒される。外見から感情の気配を感じさせない栗色の瞳は視線を逸らさず、両親の遺体を見詰めている。

『辛いと思うなら、泣けばよい』

沈黙が流れるだけかと思つた空気の中、ベヘモットが普段通りの口調で語りかけた。

『お主はフレイムヘイズでも、カムシン・ネブハーウでもない。いかに力や外見が似通おうとも、その心や生き方まで似る必要は無い。否、決して似てはならぬのだ』

ベヘモットの言葉に少年は答えない。

だが、その言葉を聞く度に少年が無意識に封じ込めていた悲しみが溢れ出し、瞳から決壊したダムのように涙が流れ出す。

「父さん……母、さん……」

膝を付き、肩が振るえ、血塗れの両手で地面に触れる。

「ごめん……守れなくて……助けられなくて、ごめん……」

独白するような嘆きの声が漏れ、流れる涙が地面を濡らしていく。

少年はその場で、ただひたすらに、泣き続けた。

それからやがて、聖王のゆりかごは管理局の尽力によって撃沈。首謀者であるジェイル・スカリエツティも逮捕され、後にJ S事件と呼ばれた混乱は終息した。

廃都市で暴れまわり、ゆりかごに致命打を与えた瓦礫の巨人については、当然調査の指令が下った。

しかし、術者の顔や特徴などについてハッキリした情報が少ない上に、使用した魔法の形跡は一切その場に残されていない為、特定はかなり困難を極めている。

少年としては絶対に管理局に目を付けられたくないのだが、本人の気持ちとは別に、少年に感謝の気持ちを伝えたい人間が何人かいるのも、また事実だった。

## 特技? 広域破壊です 続 その1

## Side Out

第一管理世界、ミッドチルダ。

かつて起こった都市全体を巻き込んだ大型テロ……通称『JS事件』が終息してから既に4年の月日が経過し、世の中は落ち着きを取り戻しつつあった。

今では影も形も残っていないが、レジアス・ゲイズ中將の死亡を始め、時空管理局……いやミッドチルダという都市は深刻なダメージを受けた。

ジェイル・スカリエッティの所有していた私有戦力『ナンバーズ』や古代ベルカのロストロギア『聖王のゆりかご』により建築物や人員の損害。

同様にインフラもボロボロとなり、都市機能がマトモに復活するまでは避難用に解放されたシエルターや避難所が一般市民の住居スペースだった。

幾つもの困難を乗り越えて普段通りの生活を取り戻すことが出来たのは、やはり人の強さあってこそだろう。

様々な専門家や民間人の積極的な協力が無ければ、建築物の修理や瓦礫の撤去だけで管理局の人員は殆どが過労死を迎えていたに違いない。



そして、どんな苦難が訪れても世界には必ず朝がやってくる。

苦難を乗り越えた者にも、心や体に未だ癒えぬ傷を抱える者にも……一生癒えることのない傷を負ったものにも。

\*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

朝の日差しが訪れ、小鳥の鳴き声が静かな街中に遠くまで響く。

そのどちらかが原因か、あるいは体に染み込まれた生活リズムによるものか、少年はベッドから身を起こした。

ニキビーつ無い褐色の肌に感情をあまり感じさせない栗色の瞳、寝ている間に少々乱れた栗色の髪を視界の端に捉えながら少年は徐々に意識を覚醒させる。

その気配を察してか、ベッドの隣の机に置かれていたガラスの飾り紐の姿をしたデバイスから声が聴こえる。

『ふむ、目が覚めたか。普段通りの起床時間を守れて実に感心』

「ああ、おはようございます。ベヘモット」  
 自身の半身とも言えるパートナーに挨拶を返し、少年……シン・エルファールは1日の始まりを改めて認識した。

\*  
 \* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*

シンは起床してすぐに制服に着替え、脱いだパジャマは綺麗に畳んで棚の中に仕舞う。

最後に鞆を手にとってベヘモットを左手の手首に付け、シンは自室を出て一階へと降りる。

階段を降りた先の居間には、いつも通り誰もおらず、静寂だけしかなかった。別段、その光景に大した理由は無い。

「ああ、おはようございます。父さん、母さん」

挨拶を口にする視線の先には、今よりもかなり幼いシンを抱きしめる女性とその肩を

抱く長身の男性が写る写真があった。

そう。単純な話、この家にはシン以外の人間が住んでいないだけだ。

『ふむ、そう言えば今日の学業は始業式だけで終了であつたな』

「ああ、そうですね。せつかくですし、帰りに騎士カリムへご挨拶に行こうかと思ひます」

『ふむ、それと両親の元にも報告に寄るのが良からう』

「……ああ、そうします」

慣れた手つきで朝食の調理を行いながらベヘモットと共に1日の予定を確認するこの時間は、既にシンにとつては変わらない日常の1つだった。

J S事件にて両親を失い、1人暮らしを始めて既に4年。

誰にも知られていないことだが、シン・エルファールにはJ S事件の際に両親を失つた怒りで単身でジェイル・スカリエッティのガジェット群と管理局員の戦闘に乱入した過去がある。

詳細は省くが、前世にて死を迎えた際に神と名乗る存在から貰つた力を思う存分に発揮してスカリエッティの戦力の多くを叩き潰した。

最終的には聖王のゆりかごに壊滅的な被害を与えるまでに至つたその力は、恐らく歴戦の魔導師や騎士でさえ及びもしない程に無双と呼べるものだろう。

だが、恨みを晴らして両親の死に長く多くの涙を流したシンは自分が何をしたのかよく理解していた。

いくら相手がテロリストで、結果的に管理局員を守ったとはいえシンのやったことはいたずらに戦場を混乱させる妨害行為だ。

罪状に照らし合わせれば色々出てくるだろうが、分類的にはテロリストと相違無いだろう。

しかも、シンの使った力……偽装を始めとする超強力な魔法は管理局にとっても非常に魅力的な力に映る。

下手をすれば、罪によつて身柄を拘束されてそのままモルモットに……なんて結末も有り得る。

だからこそ、シンは多くの者が求めて羨むであろう偽装の魔法をただ一度の使用を終えたら封印すると心に誓った。

まあ、とにかく、その意思を尊重して同意している。

シンは自分の力を極力隠して生きていくことを決め、今ではそれなりに落ち着いてきた。

今の家もミッドチルダの魔法技術によつて一人暮らしでも簡単に維持が出来るよう

手が加えられている。

埃ゴミや生活用水、ガス周りやセキユリティーなどをシステムが自動的に調整・整備してくれるので、ある程度の家事スキルがあれば子供が1人で暮らしても特に苦は無かった。

「……ああ、そろそろ時間ですね」

食器と調理器具を全て洗い終え、シンは壁に掛けられた時計を見て制服の上着に袖を通す。

窓の鍵の戸締りと電気の消し忘れなどが無いかを確認し、シンは鞆を持って玄関に向かう。

「ああ、行ってきます。父さん、母さん」

写真に写る両親に声を掛け、シンは家を出て自分の通う学院……St（ザンクト）ヒルデ魔法学園中等部へと登校した。

\*

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

「ごきげんよう、今年もまた同じクラスで嬉しいよシン」

「ああ、ごきげんよう。私も嬉しく思います、レシウス」

校門前に配置されていたクラス表に目を通して教室に入り、シンは自分の席の配置を  
確認する。

その背中に、短い金髪を揺らす1人の少年が微笑みながら声を掛けてきた。

背丈が同年代の中でもかなりの小柄に入るシンとは対照的に、その少年の背丈は歳不  
相応に高い。170はあるだろう。

少年の名は、レシウス・ベルネスト。

優秀な騎士を代々選出するベルカの名家、ベルネスト家の長男であり、この学院にお  
いてシンの一歩の友人である。

この学園が運営を再開する少し前に知り合い、少々のいざこざを経てからはシンの友  
人として気さくに接している。

はたから見ると、2人の話す様子は背丈の関係もあって歳の離れた兄弟のように見え  
る。

だが、実際には同年代の彼等の会話に遠慮や無く、レシウスは嬉しそうに話を進める。  
「そういえばシン、選択授業は何にしたんだい? 今年から赴任される応用魔導学の先

生はかなり有名な学者だそうだよ」

「ああ、それは嬉しいことですね。私は、応用魔導学の他にデバイス工学を選択しました」

嬉しいと言いながら淡淡とした口調で話すシンの言葉にレシウスは苦笑を浮かべる。

「アハハ……戦闘訓練の授業は受けないんだね。やはり、デバイスマスターを目指すつもりなのかい？」

「ああ、それか無限書庫の司書官でしょうか。資格は持っていますし」

魔法という前世では知り得なかった技術のせいもあってか、知識欲の強いシンはよく図書館や無限書庫に足を運ぶ。

その際、無限書庫に入る度に毎回毎回申請書類を提出するのに嫌気が差して司書の資格を取ったのだが、当時まだ初等部だった自分のような子供が司書の資格試験に合格したのはかなり異例のことだと理解して後悔したのは記憶に新しい。

「僕としては正直勿体ないと思うよ。キミの武術の腕なら聖王協会でも管理局でも引く手は数多くあるだろうに」

「ああ、中等部1年生の時点でAAAランクの実力と評価を持ったアナタに言われも実感が湧きませんね。それに、私が武術をやっているのは強さを求めていることではありません」

「分かっているよ、そのレアスキル（怪力）を制御する為だろう。でも、3年前自分の才能に溺れていた僕の鼻っ柱をデバイスのフルスイングでへし折ってくれたキミの実力を知っている身としては、どうしても惜しく感じてしまうんだよ」

何処か皮肉めいた言葉だったが、口にするレシウス本人の顔は楽しい過去を思い出したような晴れやかなものだった。

管理局の戦闘に乱入したあの日以来、強い怒りが何かのトリガーにでもなったのか、今まで頭の中でスイッチを切り替えて使用していたシンの能力の1つの『怪力』が何故か上手く制御出来なくなった。

流石にこのままではいかんと思ったシンはカリムに『怪力』の能力を話し、レアスキルとして登録してもらおうと共に改善の稽古を付けてくれそうな武術道場を紹介してもらった。

結果、シンの『怪力』はレアスキル『オーバーロード』と名を改め、シンはカリムに紹介してもらった道場で1年の修行を積んでレアスキルの制御を可能にした。

本当の話、レシウスはシンに感謝の想いはあれど恨みの感情など1つも無かった。

手痛い敗北によって自分を見詰め直すことが出来たからこそ、あの時よりも強くなれたのだとレシウスは思っている。

だからこそ、それほどの実力を持つ友人がソレを發揮する場を望んでいないというの



は、少々残念に思えてしまうのだ。

ちなみにこのシンとレシウスの2人だが、出会いは自他共に認める程最悪と呼べるものだった。

私用で教会を訪れていたシンがシスターシャツハの説教を馬耳東風と言わんばかりに流すレシウスと偶然遭遇。

聞こえてきた会話によると、レシウスが訓練中の騎士達を挑発し、十数人の者達を医務室送りにしたらしい。

それだけならシンもレシウスに感心など持たなかったのだが、あろうことかレシウスはその場である人物を愚弄してしまった。

『騎士の称号を持ちながら子供の僕に手も足も出ないなんて、これでは上司である騎士カリムの器も底が知れますね』

騎士カリム。フルネームをカリム・グラシア。

古代ベルカ式のレアスキル「預言者の著書（プロフェーティン・シユリフテン）」を持つ教会騎士の1人であり、管理局内でも少将の地位を持つ女性だ。

そしてその騎士カリムこそ、亡くなったシンの両親の友人であり、身寄りを失くしたシンの保護者を請け負ってくれた大恩人である。

その恩人を目の前で愚弄されては、シンも黙っているわけにはいかなかった。

その後の結果はレシウスが口にした通りである。

相手が自分と同年代の子供であるのと、自身の才能に酔っていたレシウスは余裕綽々としていた。

初撃は譲つてあげるよ、と皮肉げに笑うレシウスに対し、では遠慮無く、と淡々と告げるシンは持ち前の怪力がもたらす臂力で急接近と共にメケストをフルスイング。

へ? と間抜けな声を出しながらレシウスは反射的に剣型のアームドデバイスで防御するが、その刀身ごと砕かれてメケストは彼の顔面を直撃。

大地そのものを打ち鳴らすような震脚によつて生じた衝撃と運動エネルギーはそれだけで収まらず、レシウスの体を後方へと吹っ飛ばして壁にめり込ませた。

騎士甲冑のおかげで全身に軽度の打撲、鼻の骨折と大量の鼻血、脳震盪による気絶で踏んだが、勝負の結果は疑うことも無きシンの圧勝で終わった。

惨敗と共にこれまでの自分の人間的な未熟さを痛感したレシウスはまさに心機一転と言わんばかりに変貌を遂げた。

迷惑を掛けた人間1人1人に土下座で深く頭を下げ、シンにも謝罪と共にカリムへの侮辱を撤回し、これまでの驕りを綺麗に消し去つて鍛錬に励んだ。

結果、現在のレシウスが誕生し、程なくしてシンの友人となった。

「今日は午前だけで終わりだろう。どうだい? 久々に手合せに付き合ってくれない

か」

「ああ、申し訳ありませんが、今日は騎士カリムと両親の元に挨拶に向かおうと思いま  
す」

「なるほど、それじゃあ仕方ないな。けど、偶には相手をしてくれよ。負けっぱなしは性  
に合わないからね」

そう言つて微笑み、レシウスはシンの肩を軽く叩いて自分の席へと向かった。

その背中を見送り、シンは改めて自分の席を確認して歩を進めた。

「……ああ、近い内に放課後の予定を空けておくのでしょうか」

『ふむ、友との縁は大切にせねばな』

ベヘモットの言葉に無言で頷き、シンは自分の席へと腰を下ろした。

……そんな時、シンの第六感が自分に向けられた視線を感じ取った。

目を向けると、そこには自分を見詰める紺と青の虹彩異色……オツドアイの瞳を向け  
る1人の少女がいた。

ミッドチルダでも珍しい碧銀色の髪を靡かせながらシンを見詰める瞳の中には、強い  
関心の色があった。

だが、シンが自身の記憶を遡つても、面識の無いその少女から強い関心を向けられる  
ような理由が全く思い浮かばない。

「っ……」

考えを巡らせていると、視線が合ったことに気付いた少女は少々慌てて目を逸らし、自分の席に向かっていった。

終始よく分からなかった少女の行動にシンは内心首を傾げるが、わざわざ自分から関わる必要も無いだろうと言いついて聞かせて考えを打ち切った。

\*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

そして時刻は昼過ぎまで巡り、中等部までの生徒は始業式を終えて帰宅となった。

シンは予定通りレシウスに別れの挨拶を告げてから教室を出て、学園のすぐ近くの聖王教会本堂に足を運ぶ。

だがその途中で……

「あ、シンさんだ！ きげんよう！」

……自分の名前を呼んだ聞き覚えのある声に足を止めた。

振り向くと、そこには見覚えのある1人の少女とその友人と思われる2人の少女。

「ああ、きげんよう。お元氣そうで何よりです、リオ」

艶のある黒髪と翡翠色の瞳、それと口元に見える八重歯が特徴的な少女、リオ・ウエズリーに挨拶を返し、シンは後ろの少女2人に視線を移す。

「ああ、お友達ですか？」

「あ、うん！ すつごく仲良いんだよ！ ヴィヴィオ、コロナ、紹介するね。この人はシン・エルファールさん、私の実家で一緒に修行した人なの！」

嬉しそうに互いを紹介するリオに続き、2人の少女も礼をして自己紹介する。

「コロナ・ティミルです。2人とは友達で、一緒にストライクアーツをやってるんです」  
「初めまして、高町ヴィヴィオです。私も、一緒にストライクアーツをやってます！」

初対面ということで少し緊張があったが、明るく元氣な声から普段から礼儀正しい良い子だと分かった。

シンも一礼し、2人の顔を見ながら自己紹介を返す。

「ああ、今ご紹介に預かりました通り、シン・エルファールです。中等部1年に所属しています。ルーウエンの道場には1年ばかりお世話になったことがあり、リオとはその時に知り合いました。どうぞよろしくお願いします」

その言葉に対し、ヴィヴィオとコロナは目をパチパチとさせる。

恐らく、シンの低身長から同じ初等部の人間だと思ったのだろう。自覚もしてるし慣れてもいるのでシンは特に思うことも無い。

というか、シンの関心は全く別のものへと向いていた。

高町ヴィヴィオと名乗った目の前の少女……よく見ると、その瞳の色は翡翠と紅玉の左右で異なるオッドアイだった。

先程の視線を向けてきたクラスメイトもだが、虹彩異色とはそんなに多いモノだったろうか、と内心で首を捻る。

「シンさんは、これから何か予定あるの?」

少しばかり考え込んでみると、リオの質問の声で我に返る。

「ああ、お世話になってる人に挨拶に行くつもりです。申し訳ありませんが、もう行きませす」

「そっか。それじゃあ、また今度ね」

時間が押しているのは事実なので、シンはその場で話を打ち切った。

用事が有ると分かり、リオも呼び止めることはせずに手を振りながらシンの背中を見送った。

\* \* \* \* \*

ここ数年で歩き慣れた通路を辿り、シンの歩みはやがて一室の前で止まり、扉を軽くノックする。

「どつどつ」

部屋の中から返って来た声を聞き、シンは部屋の中へと足を踏み入れる。

そこには修道服を着た女性が2人いて、その内の1人は入室したシンの姿を見た途端に椅子から立ち上がって嬉しそうに声を掛ける。

「まあ、シン！ よく来ましたね。シャツハ、お茶の用意をお願いします」

「はい。承りました、カリム」

微笑みながら胸に手を当てて返答したシスター、シャツハ・ヌエラはシンに一礼をして退出する。

彼女は聖王教会に所属する騎士の1人……しかも陸戦AAAランクの評価を持つ超エリートだが、普段は学園で教師を務めているのでシンと会う機会はそれなりに多い。

レシウスとの一軒以来、関係者の1人でもあったシャツハとはかなり親しい仲であ

る。

恐らく、シンとカリムのことを気遣って特に言葉を交わさずに退出したのだろう。

「ああ、今日は中等部に進学したことの報告とご挨拶に伺いました」

「ふふ、律儀な所は親譲りですね。真面目で立派に育ってくれて、あの2人もきつと喜んでいますよ」

そう言いながら慈愛に満ちた笑みを浮かべ、カリムはシンの体を抱き寄せて栗色の髪を優しく撫でる。

低身長の子の頭がカリムの胸元に顔をうずめるような形になるが、シンは少々気恥しそうにするだけで特に抵抗はしない。

両親が存命だった頃から、カリムは友人の息子であるシンをまるで我が子のように可愛がっていた。

美人の女性に抱きしめられることに最初は赤面したものだが、何度も体験が重なれば流石に慣れも生まれて心に余裕が出来る。

それに、何だかんだ言っても両親に先立たれてしまったシンにとって、カリムの抱擁が与えてくれる温もりは決して嫌いなものではなかった。



\* \* \* \* \*

「アナタのご両親が無くなってからもう4年……月日の流れは、本当に早いものですね。1人暮らしにはもう慣れましたか？」

「ああ、前から両親が家を空けることがあったので大して苦労はしていません。教会ではなくあの家に住みたいという私の我が儘を聞いて頂いたこと、今でも感謝しています」

「感謝なんて必要ないわ。両親と過ごした思い出の家で暮らしたいと願うのは当然のことなのだから」

カリムの用意してくれた紅茶を飲みながら、2人は会話を交わしながらゆったりとした時間を過ごしていた。

まだ中等部に所属する子供のシンと違い、普段のカリムは多忙の身だ。

こうして卓を挟んでシンと話し合うのも、実を言うとかかなり久しぶりだったりする。

「むしろ、謝るのは私の方ですね。保護者を買って出ておきながらこうしてゆつくりと話すことさえ碌に出来ないのだから」

そう言って手に持ったティーカップに視線を落とすカリムの表情は見るからに落ち込んでいた。

シンは知らないことだが、実はカリムがシンの保護者を買って出ようとした際、反対の声が幾つも上がった。

グラシア家は、聖王教会にも管理局にも広く名の知れ渡った名家だ。

そんな名家の娘が1人の孤児の保護者を買って出るとするのは、あまり周囲に良い印象を与えないのではないかと。

要するにカリムを通して教会の世間体が傷付くのを恐れたのだ。反対したのは主に聖王教会の上層部の人間だったが、カリムはその反対を半ば強引に押し切った。

確かに、カリムも反対派の意見は理解出来る。

わざわざ保護者を引き受けなくとも、孤児院にでも預ければ良いではないかと最初は思った。

けど、出来なかったのだ。

葬式を終えた後、冷たい雨の降る中で両親の墓の前に黙って立つシンの姿を見てしまったから。

その時になってよく思い出し、カリムは気付いた。

式の最中、シンが涙を流していなかったことに。

元々感情の表現が乏しい子だというのは知っていた。だが、アレは違う、とカリムは直感で理解した。

アレは、もつと別の……心の中に刻まれた大きな傷によって生まれた虚無のように思えた。

それを思い出して、気付いて、上手く言えないがカリムはどうしてもシンを放つておけなくなった。

だが、意を決して行動したというのに、4年経った現状はこの様だ。

立派な保護者などとは全く言えない自分の様子にカリムは恥じるばかりだが、シンはゆっくりと首を振って否定した。

「ああ、そんなことはありません。少なくとも私は、あの日の墓前で手を差し伸べてくれたアナタに何度も救われました」

淡々と、だが確かな意思を宿して口に出したその言葉は、自分を情けないと思いつつもカリムの心を救ってくれる。

やがて、今日はもう帰ると席を立つシンの背中を見送った時には、カリムの心の中に渦巻いていた憂鬱な感情は無くなっていった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

カリムとの話し合いを終えて退出したシンは一度教会を出て、その近くにある墓地へと足を運んだ。

技術が発展しても墓地の見た目はさして変わらず、よく整備された広場に西洋風の白い墓標が幾つも並んでいる。

ざっと周囲を見渡し、今日は自分以外に誰もいないようだ、と考えながらシンは目的の墓標の前に立つ。

「……ああ、お久しぶりです。父さん、母さん」

目の前にある墓標にはシンの父親である『アルバート・エルファール』と母親である『ナギサ・K（クジヨウ）・エルファール』の名前が刻まれている。

「ああ、今日は中等部への進学を無事終えられたことの報告に来ました。体の方も、至って健康です」

そこまで言って、シンの言葉は途切れる。

正確に言うとは、何かを言おうとはしているのだが、上手く言葉に出来ずに口を開いた

り閉じたりしている。

シンは基本口数が少なく、会話の際も相手の言葉に答える場合が殆どだ。

そんな人間が自発的に話すというのは、中々に難しくなってしまうようだ。

「……………」

結局、シンは無理に言葉を捻り出すのをやめて、祈るように意識を自分の内側へと向けた。

脳裏に浮かんだのは、両親と過ごした楽しい思い出の数々だった。

2人はいわゆる技術屋というやつで、管理局の地上本部からもその実力を大いに期待されていた。

物静かで厳格な見た目をしているが、無限書庫や図書館から借りてきた本の内容で分からない所が有った時は細かく丁寧に教えてくれた父親。

父親を近くで支えるために同じ職場へ赴き、学校で優秀な成績を取るとまるで自分のことのように喜んで「頑張ったね」と言いながら優しく頭を撫でてくれた母親。

そんな多忙な身である両親が珍しく休みを取って来た日は、母の用意した弁当を携えてピクニックに行くこともあった。

連日で休みが取れた時は別の次元世界へ旅行に行くこともあった。

だが、最後に脳裏に浮かんだのは……瓦礫に押し潰され、血塗れとなって息絶えた姿

だった。

客観的に見て、アレは恐らくただの不幸だったのだろう。

避難の準備を終えて、シンの手を引きながら必死に走る両親の背中を見る中、視界の端に大きな爆発が飛び込んできた。

直後に聞こえてきた何かが崩れるような音で、建物が崩れたのは理解出来た。

しかし、シンが上を見上げた時、思わず絶句してしまった。

見上げた先から落ちてきたのは、真横からへし折れたように崩れ去るビルの上部だったのだから。

迫り来る死の恐怖に体が動かず、シンはデバイスに手を伸ばして身を守ることすら出来なかつた。

そんな中で、シンと同じ恐怖を感じている筈の両親だけが動けたのは、ひとえに愛する息子を守りたいと願う親心が故だろう。

技術屋であると同時に優れた魔導師でもあった両親は、言葉を交わすことなく同時に魔法を発動させた。

父親は防御魔法を展開し、母親はシン一人を対象に一瞬でベルカ式の転移魔法を発動させた。

抱き締めた母が「ごめんね」と呟いた次の瞬間、シンが目にしたのは崩れ落ちてきた

瓦礫に飲み込まれる両親の姿だった。

目を見開いたシンは思わず手を伸ばすが、返って来たのは土煙と衝撃波の風だった。

あの数秒で転移移動させられる限界の距離だったのだろう。だが、シンは見事に瓦礫が降り注ぐ範囲内の外へと離脱していた。

我に戻ったシンは、一心不乱で瓦礫を掘り続けた。

何十キロも有りそうな瓦礫を持ち前の怪力とメケストによつてゴミのように投げ捨て、掘り進んだ。

そして、瓦礫の下で互いを抱き締めながら息絶える両親の姿を見て、シンは自分の心に亀裂が走る音を確かに感じた。

「つ……………」

当時のことを思い出し、シンは無意識に拳を握り締めていた。

4年前にぶつけたはずの怒りが再び湧き上がり、心の中に黒く澱んだ感情が広がっていくのが分かる。

いつそのまま身を委ねてしまえば楽になれるのだろうか……そう考えるシンの瞳の中から光が薄れていく。

『狂気に逃れるでない、我が主よ』

だが、突如聞こえた『ベヘモット』の声が、シンの心を寸前で繋ぎ止める。

我に返ったシンが少し呼吸を荒くしながら顔に手を当てると、かなりの量の汗が流れている。

周りを見回してみると、既に日没を迎えて暗くなり始めている。

「……ああ、帰りましょうか」

『ふむ、それが良かろう』

疲労感を纏ったシンの声に、『ベヘモット』は普段通りの声を返す。

こんな時、余計な気遣いや言葉を掛けてこない相棒の性格が、シンにとってはとても有難かった。



食うのに困って入った職場がまさかのカルト教団だった

その1 (シャイニング・レゾナンス)

Side ???

皆様は、カルト教団という存在をご存知だろうか。

一般的に広く知られている定義としては、新興宗教の一種で反社会的な行為を行う信仰集団を指し示すものだ。

まあ、その新興宗教の中には伝統的な宗教から派生したものも存在しており、明確な線引きは微妙に難しいものなのだが。

多くの人が、この存在を単語として知っていても実際に見たことはないだろう。

かく言うオレも数年前まではその存在を知識の中にある単語の1つとしてしか認識していなかった1人である。

何故過去形なのかというと……オレが今現在そのカルト教団にいるからである。

その名を、ロンバルディア帝国・刻印教会。

ロンバルディア帝国が持つ軍事力の要であり、その力は国王からも絶大な信頼を得ている。遠征においては負け知らず、無敵の強さを誇ると言われている。

信仰の対象は、古の時代において、ハイエルフとドラゴンに敵対し、<sup>ラ</sup>神竜大戦<sup>グ</sup>と呼ばれる戦争を引き起こした『神』と呼ばれる存在だ。

なんでも、その強大な力で世界を造り変えようとしたらしいが、「親ドラゴン派」と呼ばれるハイエルフと、最高位の力を誇る5体の竜、<sup>ユグドラシル</sup>世界竜<sup>ル</sup>によって封じられたそうだ。そんな遙か昔の時代に君臨した<sup>神</sup>怪物を崇め、再びこの世に蘇らせる。それがこのカルト教団……刻印教会の信仰であり、最終目的でもある。加えて、その中でも特に異質、かつ常軌を逸した集団が存在する。

刻印教会特務騎士団「バイオウルフ」。

刻印教会の中でも選りすぐりの<sup>化</sup>実力者<sup>物</sup>が集う部隊であり、どういうわけかオレが所属しているSAN値直葬のクソツタレな職場である。

何せ、入団試験というのが「洗礼」と呼ばれる儀式であり、ジョツキに入った見ただけで凄まじい嫌悪感を感じる赤黒い液体Xを飲めと言われた。

え？ これ飲むの？ 飲んだら合格ですって何だオイ。

飲んだら確実に何か起こるのが予想出来たし、入り口には剣の柄に手を添えた数人の兵士が黙って待ち構えていた。

逃げたら殺すと、そういうことですかコンチクシヨウ。

ついでに部屋の隅のカーテンの奥から漂う凄まじい血の匂いは何なんですかね？  
カーテンの向こうで狩って来た動物の血抜きでもしてんの？ それとも死体が山積み  
にでもなってるの？

というか、この時点で分かり切ったことだけど、この組織マトモじゃねえ。

此処で、改めて自己紹介だ。

オレの名前はエリクス・ベルギス

『幻速の銃剣士』なんて2つ名を付けられた、刻印教会特務騎士団「バイオウルフ」に所属する最高幹部の1人である。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

メルギウス大聖堂。

今現在、バイオウルフが皇帝の命令を受けて侵攻中の大陸、アルフヘイムに構えた帝  
国軍の拠点の1つであり、幹部クラスが集う本陣だ。

その聖堂の大広間には、オレを含めて全部で5人の人影があった。

「……全員揃ったようだな。では、これより皇女殿下が立案された作戦を伝える」

鉄靴と甲冑を鳴らして声を上げたのは1人の騎士。

顔に十字傷を刻み、刃物を思わせるような鋭い眼光を持つその男の名はゲオルグ・ザルバード。

オレ達ベイオウルフの団長にして、アルフヘイム侵攻の指揮権を任された  
アーグ<sup>アラグ</sup>バラ<sup>バラ</sup>ディン<sup>ディン</sup>  
大司教騎士だ。

諸外国や帝国内部でも刻印教会の『犬』と畏敬の念を込めて言われているが、オレからすれば誤評も良い所だ。アレは『犬』なんて可愛らしいもんじゃない。その気になれば主人の首を躊躇わず食い千切る『狼』だ。

「作戦……?」  
ユグ<sup>ユグ</sup>ドラ<sup>ドラ</sup>シル<sup>シル</sup>  
世界竜のドラゴンソウルも満足に発見出来ていないこの状況で、ですか?」

そう言っただけでゲオルグの発言に質問を投げたのは、分厚いローブを着込んだ1人の男。

伸び切った青紫色の髪で顔の殆どを隠し、口元はマスクで覆われ、見えるのは赤色の酷く濁った……ハッキリ言っただけで腐った目をした左目のみ。

こいつの名前はヨアヒム・ルーベンス。

古代魔導研究の第一人者であり、生体科学や医術に天才的な能力を持っている。

既に帝国や刻印教会にもその能力を高く評価されており、「竜体力学」を活用した数多くの生体兵器を生み出している。

だが、研究実験以外のことにはまったく興味が無く、捕まえた人間を使って笑顔で人体実験をやらかす生粋の変人……マッドサイエンティストである。

オレも、バイオウルフに配属となった際、こいつには実験とやらで酷い目に遭わされた。

と、そんな時に、オレはふと湧いて出た疑問を口にした。

「おい、ヨアヒム。お前がこの前まで連れてたあの子はどうした」

「ああ、エトのことですか？ あの子でしたら、腹立たしいことにアストリアの  
ドラグナー 竜騎士達に奪われてしまいましたよ……あの恩知らずめ……」

「お前がしたことなどの辺に恩を感じれば良いのか、オレにはさっぱりだがな。あの子には文字通り地獄からの救いだろうさ」

「何を言ってるんです!?! 私がエトの研究にどれだけの苦勞と時間を費やしたか！ ああ、もうあの悲鳴を聞くことが出来ないなんて、何という悲劇!!」

もうやだコイツ。

オレの言葉に会話が噛み合って無いし、仕舞いには髪を掻き乱しながら天に向かって奇声を放っている。こう、某奇妙な冒険に出る吸血鬼の「W R Y Y Y Y Y Y!!」みた

いに。

まあ、元々コイツは大嫌いなので(むしろ好きな奴なんていないと思う)「ざまあww」と嘲笑うだけで特に何の感情も湧かない。

それよりも、あのエトと呼ばれていた銀髪の子供。どうやらアストリア側に付いたようだ。

アストリアとは、このアルフヘイムに首都を持つ王国の名前。オレ達がこの大陸に進行してから8年近く争っている 敵国だ。

別にあの子とは大した付き合いがあるわけでも無い。

時々射撃の訓練を見てやったり、ヨアヒムが言う診断という名の拷問を怖がった時に匿ってヨアヒムの顔にキレの良いグーパーパンチを叩き込んでやる程度の仲だった。

だが、あの子にとってはこれで良かったんだろう。

この場にいるオレが言うのも何だが、刻印教会は立派な外道の集まり、もっと分かりやすく言えば『悪の組織』と呼ぶのが相応しい場所だ。

対してアストリアはそれに対抗する『正義の軍勢』。どっちが良いかなんて分かり切ってることだ。オレのように、分かっていながら此処にいるわけでもないのだから。

「お前達、口を慎め。皇女殿下の御前で無様を晒すな」

そう言ったゲオルグの言葉に続き、黒い鎧を着込んだ少女が前に出る。

ツインテールに纏めた長い白髪を靡かせ、雪のように白い肌と美麗な容姿を持つ赤色の瞳は鋭い。

この少女こそ、ゲオルグが口にしたロンバルディア帝国第1皇女。

名を、エクセラ・ノア・アウラ。

最近になってアルフヘイムにやって来た本国からの視察者なのだが、実際は違う。

帝国が誇る生物型兵器、ドラグマキナを3体も連れてやって来た実際の理由は、8年近く時が経っても未だにアルフヘイムを手中に収められないオレ達を見かねた皇帝が派遣した新たな指揮官。

ちなみにドラグマキナとは、<sup>ラ</sup>神竜大戦<sup>ナ</sup>において『神』が生み出した竜を指し示すもので、今生き残っているのは5体のみ。

その全てを帝国が高度な技術によって復活させ、あの姫さんが従えている。

姫さんが連れてきたのは、『皇女の三本槍』と呼ばれる3体。

〃紅蓮槍龍〃 トリシユーラ。

〃氷蒼鉾龍〃 ゲイボルグ。

〃雷戟轟龍〃 グングニル。

その他にも、本国にて皇帝を守護する『帝国の双剣』。〃水天劍神〃 カリバーンと 〃魔

剣竜王”ダーンスレイブが存在する。

「此度の作戦の目標は、アストリア王国の手中にある「空竜」のドラゴンソウルの奪取と首都である海上都市マルガの制圧。並びに、煌竜の捕獲だ」

つまり、敵国を完全に潰す、ということになる。

「随分と至れり尽くせりな作戦だが、具体的には？」

「基本的な陽動作戦だ。まず、敵の主力である 竜騎士達ドラグナーをクラヴァール平原まで引き寄せ、包囲する。この役目はゲオルグ、お前達に任せる。ゲオボルグとグングニルにも手伝わせよう」

「承知しました。では、竜騎士ドラグナーの相手は、ゼストとエリクスにやらせましょう」

「うむ、その隙に私はトリシューラを連れて敵の首都を強襲する」

今名前の出たゼスト……フルネーム、ゼスト・グレアムはああ、と短く返事をする。

機動性を優先した鎧の無い装束を身に着けた白髪に深紅の瞳を持つ少年。

この場にいるメンバーの中で一番若い外見をしているが、その強さは帝国最強と呼ばれ、敵味方にもその恐ろしさが知り渡る程である。

「ゼストだけでなくオレも？ 随分と過剰戦力だな。というかゼスト、お前もう煌竜に興味が無いんじゃないのか？」

たしか前に一度戦って、『本気』を出したら圧勝した、とか言っていたが。



それからは竜に仇す者とか呼んでる奴を探していたはずだ。

「ああ、今でも興味ねえよ。だが、メインドイツシュを喰う為の条件だからな。本当の楽しみ、心が躍る戦いに有り付く為だ……上手くやるさ」

そう言つて口元に浮かんだ狂気的な笑みを見て、聞かなきゃよかつた、と心中で後悔する。

こいつの思考回路は、バトルジャンキーを通り越してサイコパスのソレだ。

ベイオウルフに転属されたからすぐ、こいつに銃剣を突き付けられて殺し合いをしたのは今では懐かしくもやつてられない思い出の1つだ。

そんな奴と今もこうして普通に話していられるのは、ゼストの好敵手としての興味がオレから失せたからか、それともヨアヒムよりマシだからか。

「まあ、そういうわけだ。竜騎士（ドラグナー）の相手は俺だけでいいだろ。俺と 同格  
お前まで参加したら、勢い余つて煌竜も殺しかねないしな」

「そうかい。なら任せた」

同格の部分を強調したゼストの声を無視し、オレは出口へと歩を進めた。

「エリクス、何処へ行くのだ？」

「それぞれの役割は決まった。なら、もうオレが此処にいる必要は無いだらう」

そう言つて礼拝堂を出たオレは、真つ直ぐ自分の部屋に向かつた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

Side Out

「申し訳ありません。エリクスのヤツめが無礼な態度を……」

「よい。それよりも訊きたいことがある。ゲオルグ、先程ゼストがエリクスに口にした『同格』とはどういう意味だ？」

部下の不敬を謝罪するゲオルグを手で制し、エクセラは質問を投げる。

問われたゲオルグは、その質問の内容に対して数秒の間を置いて返答する。

「どういう意味かと問われれば、そのままの意味にございます。アイツの実力は『本気』になったゼストと互角に渡り合えるほどですから」

ゲオルグの返答に、エクセラは一瞬耳を疑った。

あの男、エリクスが帝国最強と名高いゼストと互角の実力者？

エクセラの知る限り、ゼストは自分の従えるドラグマキナ、ゲイボルグを『一撃で』瀕死の状態に追いやった。

そんな規格外の強さを持つゼストと互角など、その姿をまったく想像出来ない。

「別に不思議なことじゃねえだろ。アイツの「神の血」との適合性は俺と同じくらいに高かったんだ。その分、発現したステイグマの力はデカイ」

特務騎士団「バイオウルフ」には、特殊な入団試験が存在する。

教会内では「洗礼」などと呼ばれているが、その内容はごく単純。

「神の血」を飲み、生きていれば合格、死ねば不合格だ。ちなみに、合格率（生存率）は100人に1人の割合である。

その中で生き残った者は「神の血」が体質と合わさり、その者だけの特別な力「ステイグマ」に覚醒する。

例えば、ゲオルグのステイグマはあらゆる致命傷を与えようと復活する不死身に等しい「超回復」。

ヨアヒムは対象を視ただけで思考の工程をすっ飛ばして解析し理解する「分析」。

ゼストは心臓に刻印を打ち込むことで普段は抑え込んでいる力を解放し、運動能力を始めたとした全ての出力を何倍にもブーストする「強化」を持っている。

「懐かしいですね……あの人がバイオウルフに入団してきた日のことは今でもハッキリと覚えていますよ。ゼストさんでも小さなグラス一杯分だったのに、エリクスさんはそれを無視してジョッキに入った「神の血」を一気飲みするんですから」

エリクス本人はやけくそになってグラスが目に入っていなかったただけなのだが、その時の教会内の混乱はそれは凄まじいものだった。

何せ、現存している貴重な「神の血」をたった1人の人間が全て飲んでしまったのだ。その知らせを聞いた当時のヨアヒムは唾然となつて数分間の思考停止に陥つた。

ちなみに、ゲオルグは「ファツ!？」と変な声を上げて気絶。ゼストは腹を抱えて大爆笑の後に面白そうな奴が現れたと考えていた。

「まあ、アイツの実力が見てみたいんなら、ドラグマキナを全部ぶつけてみたらどうだ？ 揃ってぶちのめされるだろうぜ」

それだけ言つて、ゼストも礼拝堂から姿を消した。

エクセラは何も言わずにしばらく考え込み、黙つて礼拝堂を出ていった。

残されたのは、ゲオルグとヨアヒムの2人のみ。

「そういえばヨアヒム、お前はエリクスとゼストの戦いを見たことがあったのではなかったか？」

「ええ、確かにありましたよ。と言つても、私にはマトモに認識すら出来ませんでした。ああいうのを次元が違うつて言うんですかね。ゲイルリッツ監獄の一区画が戦闘の余波で崩壊したくらいですし」

そう言いながら、ヨアヒムは遠い目をしながら天井を見上げる。

あの時、ゼストが気まぐれを起こして戦闘を中断しなければ、ゲイルリッツ監獄は今頃ただの瓦礫の山へと化していたかもしれない。

それだけ、2人の戦闘は凄まじいものだった。突如喧嘩を売られたエリクスは防戦に徹していたというのに、とんでもない被害が出た。

「あの2人がお互い『本気』で暴れたら、私達生きていられますかね？ いや、「超回復」を持つてるあなたは死にはしないでしょうけど……」

「考えたくもないことだな。だが、恐らくその心配は無いだろう。裏切ることもない」「おや、どうしてそう言い切れるんです？」

「ゼストとエリクスが正面からぶつかれば、間違い無くどちらかが死ぬ。だが、自身の死を引き寄せる戦いをエリクスは望まない。アレはそういう人間だ」

言ってしまうば、死ぬ確率が高い戦いはしない、ということだ。

ゲオルグがエリクス本人から聞いた話だが、刻印教会に入信したのも、元々は食うのに困っていたからという理由だ。

「洗礼」の詳細を知らされた時も、死ぬ確率が圧倒的に高い事実を知って激怒し、ゲオルグとヨアヒムを半殺しにしたくらいだ。

ステイグマに覚醒し、とてつもない強さを手に入れた今でも、エリクスは心の底で死の恐怖に怯えている。

ベイオウルフが「悪」と知りながらもそこに居続けるのも、  
“こちらに付いた方が死ぬ可能性が低いから”である。

ゲオルグは知る由も無いが、その強い恐怖心は一度死を体験した  
“前世の記憶”が存在するからこそである。

「我々と敵対すればほぼ間違い無くゼストさんと戦うことになる。けど、ゼストさんと全力でぶつかれば高い確率で死ぬかもしれない。それがイヤだから裏切らないと」

「そうだ。下手な忠誠心や目的よりもずっと信頼出来る。あの非協力的……というか、自由気まま過ぎる姿勢には手を焼かされるがな」

そんな会話をしながらも、ゲオルグとヨアヒムの体は半殺しにされた時のトラウマによつて無意識の内に小さく震えていた。

裏切りはせずとも嘗められるのは許さない。

抑えるところはしっかりと抑える抜け目の無さも、エリクスの強さの1つである。

\*

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

## Side エリクス

洗面所で顔を洗い、少し乱れた髪を鏡を見ながら所々直す。

鏡に映るオレの顔は、確実に前世よりも整っているもので、首の後ろを隠すくらいにまで伸びた髪は右先端部の青色をメツシユのように残して見事に真っ白となっている。

元々青色の方が地毛なのだが、入団試験の際にこうなってしまった。

腫の色も、両方とも金色だったのが今では片方だけ血のような深紅だ。

変色した青色メツシユの白髪に金と深紅のオツドアイって……鏡見る度に思うが、何処の中二病患者だオレは。

溜め息を吐いて気持ちを切り替え、ここ数年で着慣れた服を身に着ける。

少し白の明るさが混じった紺色のジーンズに少し薄暗いグレーのYシャツ。その上から丈が長く体と生地の間之余裕が少ないロングコートを思わせるようなフードを羽織る。

刻印教会に支給される装束や鎧とは明らかに違うが、別に誰も咎めない。

いや、オレを咎めることの出来る奴がいない、と言う方が正しいか。

そのまま部屋を出て外の空気を吸おうと正門に着くと、背後から僅かな気配を感じた。知っている気配なので、特に警戒心も抱かないが。

「おや、もう軍議は終わったのかい？」

「ベアトリスか……」

黒髪に翡翠の瞳、褐色の肌とエルフの種族特有の尖った耳、明るい黄色を基調としたドレスと装束を合わせたような服装。

オレやゼスト達のように「洗礼」に合格したわけではなく、その隠密と暗殺に長けた能力を買われてバイオウルフに入団した珍しい女ダークエルフだ。

「役割が決まったから先に抜けてきた」

「相変わらず我が道を行くヤツだねアンタ。偶には協力的になってやったらどうだい？」

「キ○ガイイが奇声上げて、戦 闘 狂ゼストが楽しそうな笑み浮かべてるような空間で最後まで話し合いに付き合えてか？」

「……アタシが悪かったよ」

気まずそうに目を逸らしながらベアトリスはオレに謝る。自分の過ちを素直に認めるのは良いことだな。

「そういうお前は どうして軍議にいなかったんだ？ あの姫さんは出席してたのに」

「そのお姫さんに頼まれて捜し物をしてたんだよ。コイツと一緒にね」

そう言つてベアトリスが後ろを指差すと、そこにいたのは黄緑色の刺々しい鱗と雷撃



の輝きを纏った竜……ドラグマキナの一体、グングニルがいる。

「なるほど……んで、作戦があるから戻って来たわけか」

「そういうことさ、アンタはゼストと一緒に 竜騎士の相手だつて？ ゲオルグも随分と相手を警戒してるんだね」

「<sup>ドラグナー</sup>竜騎士の強さは大した問題じゃねえ。オレかゼストがその気になれば簡単に皆殺しに出来る。アイツが警戒してんのは多分煌竜の暴走だ」

そう言うのと、ベアトリスは目に見えて顔を曇らせた。

<sup>ドラグナー</sup>竜騎士の中にはコイツの昔馴染みがいると聞いたが、大方心の中でそいつ等の心配でもしているのだろう。

敵だと割り切れないなら、さっさとこんなところ裏切つちまえばいいのに。

「お前は次の作戦でどう動くんだ？」

「アタシはエクセラ様とトリシューラが敵の目を引き付けてる隙に城に忍び込んで「空竜」のドラゴンソウルを盗んでくるのが仕事さ」

なるほどね、とベアトリスの言葉に心中で納得すると、自分に向けられた視線を感じてその方向に目を向ける。

そこには、何処か試すような目付きでオレを見るグングニルがいた。

「何か用か？」

『ベアトリスから、貴様の實力はあのゼストと同格だと聞いた。それは真か』

「周りが勝手にそう言ってるだけなんだがな……まあ、否定はしない。実際、オレに勝てるのはゼストくらいのもんだろうからな」

その言葉と共に、オレの全身から僅かに放たれた威圧感がベアトリスとグングニルを一瞬の間に圧倒する。

口にした言葉の中に、一切の自惚れはなかった。

ベイオウルフに入り、色々なモノを犠牲にしてオレが手にした力はそれだけの自信を持たせてくれる。

オレは心の底では死ぬのが怖い臆病者だ。

だが、決して他者の理不尽な力に蹂躪される弱者ではないし、ならない。

誰かの都合で殺されるような終わり方は、うんざりだ